様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００３２５

研究課題名（和文）明治20年代における自然思想の形成に関する研究：民友社・宮崎湖処子を中心に

研究課題名（英文）Study on the Formation of Natural Thought in the Meiji 20s : Focusing on Miyazaki Koshoshi, Minyu-sha

研究代表者
永井　聖剛（Nagai, Kiyotake）

愛知淑徳大学・創造表現学部・教授

研究者番号：５０３８７８３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治20年代の思想・文学・ジャーナリズムの分野を先導した民友社という複合的運動体の中でいかにして〈自然思想〉が胚胎し、民友社文学と呼ばれるテクストへと結びついていったのかを、主に、(1)民友社の刊行物および徳富蘇峰の言説に見られる〈自然思想〉の調査と検討、(2)民友社文学、特に『帰省』「自然児」などの宮崎湖処子の小説の再検討、といった観点から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義として次の2点を挙げることができる。(1)これまで対立的に捉えられてきた「政治」と「文学」とを、民友社・徳富蘇峰の言説を再検討することで、〈自然〉という思想のもとで総合的に検証できる点。蘇峰においては政治も文学も〈人間の自然human nature〉が発現するもので、それは湖処子・独歩らに継承された。(2)近代的「個人」に裏付けられた〈表現主体〉の自明性を相対化する可能性が〈自然〉にはあるという点。坪内逍遙・二葉亭四迷を起源とするリアリズム系統の表現に加え、個人を包摂する〈自然〉を基点とした民友社的な文学表現を併せて見ることで、日本近代文学の表現史はより豊かなものになるはずである。

研究成果の概要（英文）：This study clarified how "natural thought" was conceived in the movement of the Minyusha, which led the fields of thought, literature, and journalism in the Meiji 20s, and how it was linked to the texts known as "Minyusha literature". The specific subjects of this research are (1) "natural thought" as seen in Minyusha publications and Tokutomi Soho's discourses, and (2) Miyazaki Koshoshi's novels, mainly "Kisei" and "Shizenji".

研究分野：日本文学

キーワード：自然（思想としての自然）　民友社　徳富蘇峰　宮崎湖処子　国木田独歩　インスピレーション　ワーズワス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自然環境と人間との関わりを問い直す超域的な問題提起が、研究開始当時もそして現在でも、諸方面から提出され続けている。その背景に、地球規模の気候変動や生物多様性の喪失への関心の高まりがあることは言うまでもない。人文社会分野に限って見てみても、『日本の環境思想の基層 人文知からの問い』(秋道智彌編,2012)、『自然と人為』(岩波講座「日本の思想」第四巻,2013)などが、研究分野の別を超えた協働的な問いかけをしていたし、また、エコクリティシズムという視点のもとに、国内外の研究者が結集して、あらたな研究成果を世に問うてもいた。たとえば、『〈交感〉自然・環境に呼応する心』（野田研一編,2017）は、人間と自然とを結ぶ回路としての〈交感〉に着目しながら「人間-自然の関係学」の構築をめざす試みである。また、日本文学史の文脈に科学史と文化史という視点を取り入れた『日本人の自然観』（鈴木貞美,2018）が刊行されたのも、この時期のことである。自然に対して人間がいかに働きかけてきたのかを、言説のレベルで総合的かつ歴史的に把握し、私たちが生きる現在にフィードバックすること。それは、持続可能性（sustainability）を支える人間活動（エコロジー、経済、政治、文化など）のうち、「文化」の分野にかかる重要な今日的課題である。

それまで報告者は、明治 30～40 年代の文学テクストを対象に、自然と人間の営み（人生）とを結びつける文学的主題がいかに形成・受容されてきたのか、その過程の解明に取り組んできた（永井聖剛「自然としての人生―徳冨蘆花『自然と人生』と無常観の近代―」2016 など）。簡潔にまとめると、「立身出世」や「成功」への対抗概念としての「自然（おのずから・あるがまま）」に特別の価値を見出し、そこに「自己」あるいは「人生」を重ね合わせるといった趣の文学的主題は、明治 30 年代に形成され一般化し、明治 40 年代には中心的な位置を占めるようにまでなった（その典型例が自然主義文学である）。さらに本研究では、研究対象を明治 20 年代にまで遡らせて、その起源を探ることで、明治期をほぼ貫通する一筋の歴史を照らし出すことを目指すこととした。そこで得られるであろう新しい歴史的パースペクティブが、「自然と人生」の問題を日本近代文学研究という限られた領域から解放し、広く人文社会分野に開かれた課題へと接続・展開してくれると考えたからである。

２．研究の目的

本研究は、明治 20 年代の思想・文学・ジャーナリズムの分野を先導した民友社の運動を支えた徳富蘇峰の思想と、『帰省』(明 23)、『ヲルヅヲルス』(明 26)などを著した宮崎湖処子の動向に焦点を当て、自然と人間との関係を書き募ることがいかにして近代文学の主題になり得たのか、その起源と生成過程との解明を課題の核心に据えたものである。

日本において〈自然〉という語が一般に定着したのは、20 世紀初頭、すなわち明治 30 年代のことである（三枝博音「『自然』という呼び名の歴史」,1958）。それは英国と同様に、産業資本主義と実力主義とが急進行した社会状況下でのことである。ワーズワスの強い影響を感じさせる徳冨蘆花『自然と人生』（明 33、民友社）、国木田独歩『武蔵野』（明 34、民友社）が〈自然〉の一般化に一役買ったことは言うまでもないし、その思潮がさらに田山花袋や島崎藤村らの自然主義文学に流れていったことも周知のことがらである。また一般に「反自然主義」に分類される夏目漱石にとっても、漱石の影響を受けた武者小路実篤ら白樺派の文学者にとっても、〈自然〉は格別の意味を持つものであった。これに『ホトトギス』や『アララギ』の「写生」を加えてもよい。これらが、日本における「自然思想」の一水脈である。

本研究が、明治 20 年代の民友社および宮崎湖処子に着目したのは、上記の蘆花・独歩の作品を生んだのが民友社であったということのほかに、日本初の本格的なワーズワスの紹介（『ヲルヅヲルス』明 26,民友社）が、宮崎湖処子によるものだったからである。またその湖処子は、『帰省』（明 23）や「自然児」（明 28）などの小説でいち早く主題としての〈自然〉を作品化した先駆的な作家でもあった。これらは、明治２０年代の民友社という場において、〈自然思想〉が顕在化するための機が熟していたことを推測させる徴候である。当時の民友社に〈自然思想〉が胚胎するための諸条件がおのずと揃っていたのだとしたら、それはいったいどんな要素だったのか―本研究ではこの問いを、蘇峰と湖処子の言説を通して解明することを目指した。

３．研究の方法

民友社という複合的運動体の中でいかにして思想としての〈自然〉が胚胎し、宮崎湖処子の文学的営為へと結びついていったのか。いわば「地」と「図」の関係に当たる両者の問題を有機的関連のうちに描き出すために、3 本の柱からなる研究をおこなった。

① 民友社の刊行物に見られる〈自然思想〉の調査と検討
　主に、明治 20 年代の『国民之友』および徳富蘇峰の著作物に見られる〈自然〉の思想を調査し、それが文学のみならず、平民主義や自由経済の思想を根底から支えていることを確認する。

② 『帰省』を中心とする宮崎湖処子の小説の再検討
　『帰省』は、徳富蘇峰の絶賛を受けて世に広まった小説である。「田園小説」「帰省小説」と呼ばれる一ジャンルを築いたとされる『帰省』は、従来、陶淵明の田園趣味やアーヴィング『スケッチブック』などの影響関係のうちに語られるのがもっぱらであったが、当時育まれつつあった〈自然思想〉という、より大きな文脈の中で捉え直しつつ、その表現上の特性を明らかにする。

③ 『ヲルヅヲルス』本文の検討
　湖処子による評伝『ヲルヅヲルス』の本文がいかなる形成過程を経て成り立ったのかを明らかにする。それはおのずと、湖処子が当時の限られた参照枠の中でどうワーズワスを受容したのか、その摂取と独自展開のありようを検証することにもなる。

４．研究成果

⑴ 初年度である 2020 年度には、上記の①「民友社の刊行物に見られる〈自然思想〉の調査と検討」と②「『帰省』を中心とする宮崎湖処子の小説の再検討」のうち、①についてはもっぱら資料収集をおこない、②については『帰省』の文体的特徴に焦点を当てた再検討をおこなった。
　後者の成果の一部は「宮崎湖処子『帰省』を読む―「帰思」が生まれるまで―」にまとめた。この論文では、上京・遊学という近代特有のトピックと密接なかかわりのある「帰省」という新しい主題が、漢詩文をはじめ、欧米文学、和文、自作の小説や新体詩、日記など、古今東西の先行テクストを縦横に引用しながら織りなされていたことに着目。その異種混淆的かつ冗長・煩雑な迂路を経てようやく、帰省する意思＝帰思が形成されるに至ったことを論じた。

⑵ 二年目である 2021 年度には、上記①②に加え、③「『ヲルヅヲルス』本文の検討」も並行しておこなった。具体的な成果物としては、②の領域で２本の論文をなした（「『帰省』を読む（その二）―その言語的多様性について―」、「『帰省』を読む（その三）―その言葉の正しい届け先はどこか―」）。和・漢・洋の思想が相乗りする相互交通的な言語空間のなかで、思想としての〈自然〉が翻訳されていく過程を検証したものである。
　①については具体的な成果をなすには至らなかったが、「インスピレーション」（明 21）などに表れた徳富蘇峰の思想に「人間の自然 human nature」を重視する傾向が看取されること、その点において、理性や合理性を重んじた一世代前の啓蒙思想家たちとの相異が明らかであることなど、具体的な方向性を見いだすことができた。
　なお、当該課題の研究対象（宮崎湖処子）とは直接結びつかないが、2022 年 1 月に単著『自然と人生とのあいだ　自然主義文学の生態学』を上梓し、この第一章・第八章において民友社文学者の徳冨蘆花・国木田独歩における〈自然思想〉の形成についてまとめることができたことを、本研究と密接に関連する成果としてここに記しておく。

⑶ 最終年度である 2022 年度には、主に上記①のテーマにおいて成果を得ることができた。具体的には、研究発表「主語の消し方　方法としての〈自然〉」を 2022 年 11 月におこない、これをもとに論文「主語の消しかた　方法としての〈自然〉」をなした。また同じ①系統の成果として、論文「自然と同化せよ　徳富蘇峰、経済と文学との交叉点」も発表した。徳富蘇峰の〈自然思想〉の解明は本研究全体の中心を占める課題だったので、これらの成果を残せたことは意義あることだった。②については、年度内の発表はかなわなかったが、論文「〈自然児〉の誕生と死　宮崎湖処子「自然児」の位置」を学会誌に投稿中である。なお、テーマ③については、『ヲルヅヲルス』とその原典である Myers『Wordsworth』（1881）との比較検討を前進させたものの、①・②に注力した結果、目に見える成果を得るには至らなかった。今後の研究に期したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 永井聖剛	４．巻 12
２．論文標題 『帰省』を読む（その二）－その言語的多様性について－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知淑徳大学論集創造表現学部篇	６．最初と最後の頁 一－一九
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井聖剛	４．巻 9
２．論文標題 『帰省』を読む（その三）－その言葉の正しい届け先はどこか－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要	６．最初と最後の頁 78-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井聖剛	４．巻 8
２．論文標題 宮崎湖処子『帰省』を読む：「帰思」が生まれるまで	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要	６．最初と最後の頁 60-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井聖剛	４．巻 10
２．論文標題 主語の消しかた　方法としての〈自然〉	５．発行年 2023年
３．雑誌名 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要	６．最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井聖剛	４．巻 13
２．論文標題 自然と同化せよ　徳富蘇峰、経済と文学との交叉点	５．発行年 2023年
３．雑誌名 愛知淑徳大学論集創造表現学部篇	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 永井聖剛
２．発表標題 主語の消し方　方法としての〈自然〉
３．学会等名 名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター　TSCセミナー15（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関